

聖書:使徒の働き17章16～34節

説教:悔い改める

はじめに

パウロはエーゲ海に面した地域を巡りながらユダヤ人や異邦人に向けてイエス・キリストの福音を語ります。それを聴いてある人たちは信じましたが、ユダヤ人からはひどい迫害を受けました。あるときは鞭に打たれ牢に投げ込まれ、あるときはローマ皇帝に背いて世間を混乱させようとしているテロリストであると訴えられていきます。いのちの危険を感じたパウロたちは、仲間にも助けをもらいながらアテネの町にやってきた。それが前回までのあらすじです。

## 1 アテネ

### 1) 哲学

そのアテネがどんな町であったのか。聖書には二つのことが書かれています。一つ目。アテネは哲学の町であった。皆さんも名前だけは聞いたことのあるソクラテスとかプラトンとかアリストテレス、彼らは紀元前四百年頃にアテネで活躍した。パウロがアテネにやって来たのは西暦五十年頃でしたが、当時は哲学が盛んに議論されていた。そのなかでも代表的なのが18節にあります。エピクロス派とストア派でした。どちらのグループもどうすれば人は幸福になれるかを考えた。簡単にまとめれば、エピクロス派は心に重点を置く。精神的な心の安らぎこそが重要なのだと考えた。一方のストア派は知性に置く。強い知性によって幸福が得られると考えた。いずれも人間の努力に主眼があります。

### 2) 偶像

アテネの町二つ目の特徴。そのことをパウロは22、23節でこう言っております。「あなたがたは、あらゆる点で宗教心にあつい方々だと、私は見ております。道を通りながら、あなたがたの拝むものをよく見ているうちに、『知られていない神に』と刻まれた祭壇があるのを見つけたからです。」

アテネの町に偶像や祭壇があふれている。これを読むと日本と同じだと感じます。道ばたには地蔵さんがありお寺もあり神社もある。その神社には石で彫られた狛犬がいたり狐がいたり。また古い木を拝んでいたりもする。拝むだけではない。金や銀や高価なものをささげ、神も仏もお腹も空くだろうから食べ物やお酒を供えをする。豊かな収穫を与え、運が開けるようにし、災いにあわないよ

うにしてくれるならどんな神でもかまわない。アテネの人たちも同じでした。町には偶像があふれていて、どれもこれもかまわず拝んでいた。

## 2 神と人

### 1) 神によって造られた

その偶像の中に「知られない神」と刻んだ祭壇がありました。そこをとっかかりにしてパウロは聖書の神を解き明かしていきます。

24節。「この世界とそこにあるすべてのものをお造りなされた神は、天地の主ですから、手で造られた宮にお住みにはなりません。」

この世界が神によって造られ、人が生きようになっても神の手によるというのであれば、パウロの言うとおりに、神が人の手で造った宮に住むはずはない。腹がすいて困るはずもない。よく考えると辻褄が合わないことを人間はしているわけです。

こう言いますと信心深い方から反論されるかもしれません。「どんな形であれ神を敬おうとするのは尊いことなのだから、文句を言われる筋合いはない。」もちろんそのとおりです。パウロもその点は認めている。「アテネの人たち。あなたがたはあらゆる点で宗教心にあつい方々である。」でも、それが本当に正しいのか。そこを切り込んでいきます。

### 2) 神を求めるようにして下さった

それが26、27節なのですが、このまま読んでよくわかりにくい。そこで、もう少しわかりやすく訳し直すところなる。「神は、一人の人からあらゆる民を造り出して、地の全面に住ませ、それぞれに決められた時代と、住まいの境をお定めになり、人が神を求めるようにして下さいました。」

毎朝太陽が昇り、夕方になると日が沈み、雨が降り、風が吹き、春に蒔いた種が秋には実を結ぶ。夜空を見上げれば、数え切れない星が正確な軌道を描いて輝いて天空を巡っている。道ばたに目を移せば一輪の花が裂いていて、どうしてこのようなすばらしい形と色合いをしているのかと驚く。世界は不思議に満ちている。この世界は誰が造ったのか。それは神と呼ぶ方なのだろうか。そんなふうにして人は神を求めるようになった。そこまではよい。

### 3) しかし無知になった

問題は先です。アテネの人々も神を求め、金や銀や石を彫ってそれを神として拝んでいました。でも、モーセの十戒にはこう書かれています。「あなたには、わたし以外に、ほかの神があつてはならない。あなたは自分のために偶像を造つてはならない。それを拝んではならない、それらに仕えてはならない。」(出エジプト記20章1~5節一部省略)

確かに偶像を拝むことは律法に違反しています。でもパウロはパリサイ人のように見える所だけを見て律法違反だと言っているわけではありません。

アテネの人たちは、神を求めていながらもその神がどなたであるのかわからなかった。それで「知られない神に」という祭壇を築いたり、いろいろな形をした神を造って拝んだ。

そもそも人間は神に造られたはずなのに、どうして造ってくださった方である神がわからなくなったのか。それも聖書に書いてあって、人間の罪のためであると言います。大事なことは隠して嘘をつき、人の持っているものをねたみ、隠れて姦淫し、盗んでいる。全部罪です。

その罪のことをわきに置いて、なんでもいから神を拝んでいれば尊いと言っても、それは人間の都合でしかない。根本にある罪の問題のことを知りませんと言って済ますわけにはいかない。

## 3 イエス・キリスト

### 1) 義をもってさばく

神はどうされるか。31節です。「なぜなら、神は日を定めて、お立てになった一人の方により、義をもってこの世界をさばこうとしておられるからです。神はこの方を死者の中からよみがえらせて、その確証をすべての人にお与えになったのです。」

私たちは、「お立てになった一人の方」とはイエス・キリストのことであることを知っています。でも相手は初めて聞くギリシャ人なので、イエスという名前もキリスト(油注がれた救い主)という称号も出さずにこのような言い方をします。

では、「日を定めて」「義をもってこの世界をさばこうとしておられる」はどうでしょうか。マタイの福音書25章31~33節にこうあります。「人の子は、その栄光を帯びてすべての御使いたちを伴って来るとき、その栄光の座に着きます。そして、すべての国の人々が御前に集められます。人の子は、羊飼いが羊をやぎからより分けるように彼らをより分け、羊を自分の右に、やぎを左に置きます。」

羊は天の国に迎えられ、やぎは永遠の火で焼かれていく。これが神による最後の審判と呼ばれるものです。その日がいつであるかはわかりませんが必ずその日が来ます。

神が人をさばくと聞いて恐ろしいと思うかもしれませんが、もし神がこの世界をさばかないとしたらどうなるか、一度考えてみたらよい。何でも包み込む優しい神さま。すばらしいと思うのでしょうか。反対です。もし神がこの世界をさばかなかったならば、神は冷酷な方になる。なぜか。この世界には、真実をゆがめる人たちがいます。嘘をつく者が大きな顔をし、不正な手段を使ってお金を儲け、権力を握っている。悪い人たちが栄えているように見える。そのいっぽうで、正直に生きようとしている者は、正しく評価されず、かえってひどい扱いを受けている。飢えや戦争で殺される。こんなことがいつまでも続いていいはずがない。悪い者がさばかれ、正しい者がきちんと名誉を回復されていくべきだ。皆思っている。私たちの心に良心というものがあって、それが叫ぶわけです。まさにそのとおりです。神もそう思っておられる。だから神はこの世界をさばくと約束される。その約束があるから、たとえ私たちがこの地上で不当な扱いをされても、希望がある。生きる事ができるわけです。

では誰が悪者なのでしょう。自分以外のほかの人、ですか。それも実は皆さんが気がついている。悪者はさばかれるべきだと言いながら、どこかでビクビクしている。なぜか。先ほども言いました。私たちは、悪い心をもっているのです。罪というものを抱え込んでしまっている。

### 2) 悔い改めを命じている

いったいどうしたらよいのでしょうか。このままでは、私たち全員さばかれておしまいです。そこでパウロはこう言います。30節後半。「今はどこでも、すべての人に悔い改めを命じておられます。」

「命じておられます」と聞くと、へそ曲がりな私は反射的に「いやだ」と言いたくなります。でもよく考えると本当は神は命じているのではない。イエス・キリストはどのようにして十字架につかれましたか。黙ってほふり場に引かれていった。何も言わない。十字架の上で私たちの身代わりとなって罪のさばきを受けられた。悔い改めなさいと、いっさい言わなかった。主のからだに裂かれ、血が流されていく。ただ黙ってその姿を見せてくださいました。

鳥や獣や石で彫ったものをありがたいと言って  
拜む前に、十字架につるされた神を見たらどうで  
しょうか。あそこに罪を赦す方がおられる。わた  
しのためにいのちを捨ててくださる神がおられる。  
だから神は言うのです。偶像を拜んでも、その神は  
あなたを救うことができない。十字架を見なさい。  
そこにあなたの救いがある。

### 3) 死者の中からよみがえらせた

本当でしょうか。パウロの作り話ではないか。  
信じただけで罪が赦される。そんなうまい話があ  
るはずがない。そう、話がうますぎます。そこで神  
はどうしたか。これが本当であることを目でわか  
るように証拠を与えてくださった。31節後半です。  
「神はこの方を死者の中からよみがえらせて、そ  
の確証をすべての人にお与えになったのです。」

パウロの話を知っているのは知性に優れた人た  
ちです。知性によって神も理解できると思い込んで  
います。ですから、死人がよみがえると聞いてあざ  
笑いました。

しかしパウロも小さな時から英才教育を受ける  
ほどのエリート中のエリートでした。自分が語って  
いることがどれほど常識外れかはよく知っている。  
それでも彼は確信を持って伝える。なぜか。彼自身、  
よみがえられたイエス・キリストに出会ったからで  
す。どんなふうにして出会ったか。彼がパリサイ派  
の若きリーダーとして一生懸命クリスチャンを迫害  
していたときでした。彼は雷に打たれるようにして  
イエスに出会います。そしてこう言われた。「わた  
しは、あなたが迫害しているイエスである。」自分  
は神を十字架につけた罪人であった。初めて気が  
ついた。それを教えてくれたのは、よみがえられた  
イエスでした。そういう経験をしてきたので、どん  
なに笑われようともはっきりと証言する。「イエ  
スは死者の中からよみがえられた。」

死んだ者に本当のいのちを与えてくださる神を  
あがめます